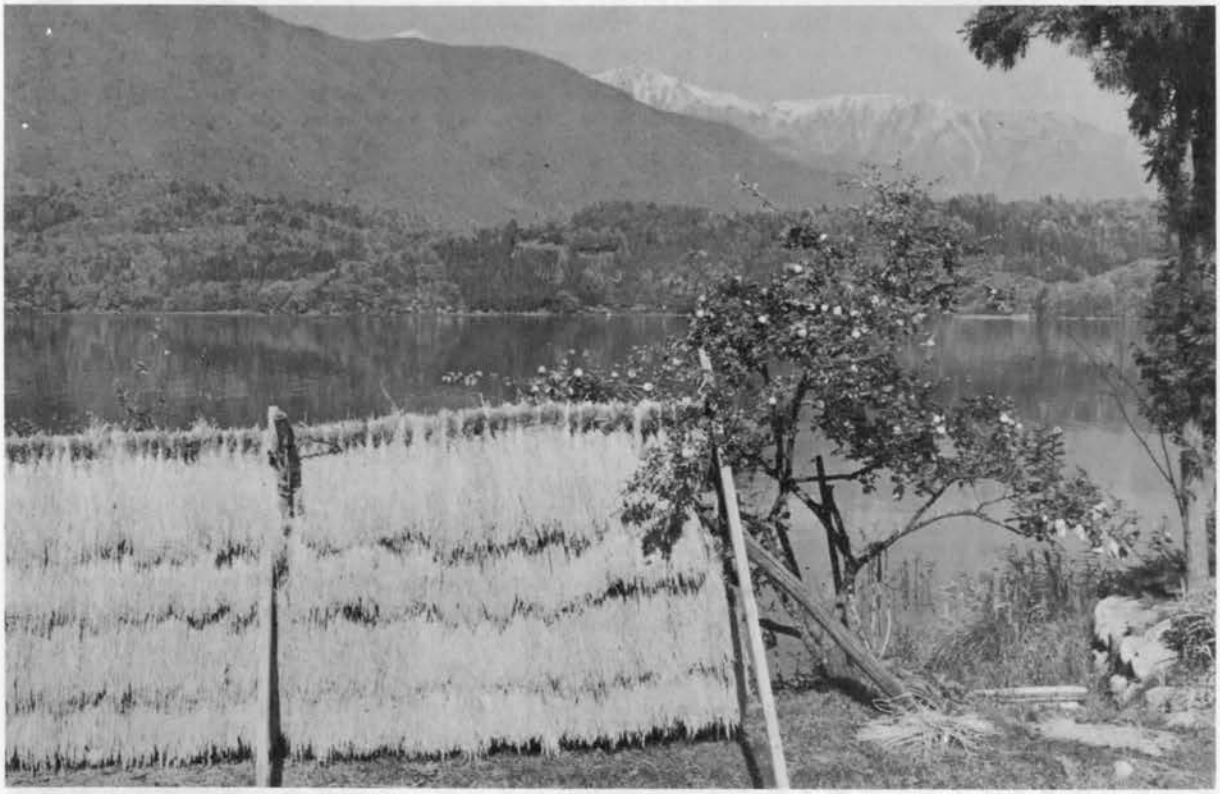
山と博物館

第28巻 第10号 1983年10月25日 大町山岳博物館



青木湖の秋

秋に思う

夏山の楽しかった話しもいつしか去りし日の思い出となり、山岳博物館に、山の幸〝きのこ〟が陳列される頃は、もう秋の夜も長く、豊年を祝う祭り囃子の音が聞こえて来ます。

読書の秋、スポーツの秋、また食欲の秋…秋は一年中で一番楽しく、反面忙しい季節でもあります。

今年も夏から秋にかけ、市民スポーツ祭、市民登山、針の木の慎太郎祭、各地区の運動会と無事終りました。こゝで、これら事業をふり返って見ることを忘れないことです。あらゆる角度より反省し、新しい次なる夢がそこから芽生えることを心がけたいと思います。

山岳博物館へ入館して感じたこと。

始めて見たときは神栄町の旧館であったと思います。アルプスの王者ともいうべきイヌワシが飼育されていたのを思い出します。

現在の場所に移転してからは次々と日本唯一の山岳博物館として充実され、役職員の努力により、数多い入りきらない程の資料が展示されています。それは創始期の貴重な遺品より現在の発達した用具まで、山での必需品、登山用具、山小屋、登山路（特に人物）、信仰、山の唄…と歴史が展開されています。

夏休みの子供達の自由研究として、山岳歴史の勉強を、岳都の与えられた場として益々の活用、利用を願うものです。

こゝ大町の秋は西(岳)山の紅葉より始まります。黒四ダムへの途中、車窓より眺める紅葉、高瀬渓谷、大町ダム、七倉ダム、高瀬ダム、それぞれの眺望、もう見頃だと思います。

ダム工事はもうそろそろ終りと聞きます。旧道は、拡張された新道へ移され、ダムサイト等には遊歩道がつけられるといわれます。私達市民がより良い環境の中で、新しく誕生する観光諸施設の利用、活用が出来ることを願うものです。

（大町市社会教育委員　中島　洋一）

山の恩人・武田久吉博士

山崎安治

今日の登山の隆盛を築いた日本の登山界のパイオニアの一人が武田久吉博士である。亡くなられてから、すでに十年以上の歳月が流れ、いまの若い人びとにとって忘れられた形になってしまっているのは、まことに残念なことである。いまふうの岩や氷と取組むといったクライミングをされた方ではなかったので、こういった登山にしか眼を向けない現代の登山者が、武田博士の存在すら知らないというのは無理からぬこととはいえ、日本の登山の歴史の上に武田博士の残された足跡は不滅の光彩を放っているのである。

順序として、まずその略歴を紹介しておかなければならない。

武田久吉は、明治十六年（一八八三）三月二日、駐日英国大使アーネスト・メイスン・サトウ卿と、紀州藩出身の武田兼の二男として東京市麹町区飯田町で生れた。かつて徳川千姫が余生を送ったという吉田御殿の跡といわれる屋敷内であった。東京府立尋常中学（後の府立一中、いまの日比谷高校の前身）を経て、東京外国語学校に学び、日本博物学同志会々員として植物の研究と登山に深い関心を持ち、明治三十八年（一九〇五）十月、同志七名とともに発起人となり日本山岳会を創立し、幹事としてその発展に寄与を惜しまなかった。

昭和41年10月　尾瀬にて

明治四十三年（一九一〇）三月、渡英し王立キュー植物園で植物学を研究、明治四十五年（一九一二）ロンドン大学植物科を卒業してバーミンガム大学に転じ、淡水藻類の研究を続け、大正五年（一九一六）二月に帰国、京大、九大、北大の講師を歴任、以来生涯をかけて高山植物の分布と分類の調査研究のため日本全国の山々に足を伸ばし、植物の垂直分布に対する学説を確立し、そのかたわら自然保護に全力を傾注した。

昭和十年日本山岳会名誉会員、昭和二十三年日本山岳会六代目会長、昭和四十二年初代日本山岳協会々長を務め登山界の発展に力を注いだ。昭和三十九年十一月、勲四等（旭日小綬章）に叙せられ、昭和四十五年三月、多年にわたる高山植物の生態に関する研究に対し、第六回秩父宮記念学術賞を受賞、昭和四十七年六月七日、東京千代田区東京逓信病院で脳出血のため八十九歳の生涯を閉じた。

多数の著作を出され、中でも『尾瀬と鬼怒沼』（昭和五年・梓書房）、『高山植物図鑑』（昭和八年・梓書房）、『登山と植物』（昭和十三年・河出書房）、『原色高山植物図鑑』（昭和三十四年・保育社）、『山への足跡』（昭和四十五年・二見書房）、『明治の山旅』（昭和四十六年・創文社）など特によく知られている。

山とのかかわりあいは早く、箱根山に出かけたのは、まだ小学校入学以前で、十歳の夏には伊香保に行った。妙義山に登ったのは十二歳、小学校の高等三年生のときであった。日本鉄道株式会社が高崎から軽井沢まで碓氷峠に二十六のトンネルを堀り、アプト式の機関車を通したのは明治二十六年のことで、明治二十八年八月、この鉄道の見学を思い立ち、三つ年上の兄栄太郎につれられ、幼なじみの、後の劇作家小山内薫、母親兼の四名で、鈍行で上野から六時間もかかって高崎に着くと、いったん下車し、切符を買い換えて信越線に乗るのだが、横川まで行くなら松井田で下車して妙義山に登ろうということになった。

母親を妙義の町の宿屋に残し、三名で七廻峠から第一、第二、第三、第四の石門をくぐって旭岳の岩峰に立った。この頂上でカノコユリが一輪満開でほほえんでいるのに眼を見張った。さすが平地と違い、こんな花が見られるのかと驚き、山への興味はこのときざしたのであった。このユリの花との出合いが武田久吉を高山植物と結びつけるきっかけとなったのであり、植物を求めて山を登り、山を愛し続ける生涯のスタートとなったのである。

登山の味を覚えた翌明治二十九年の夏は一ケ月を日光で暮した。日光板橋町にある浄光院という大きな古寺の空室を借り、一家で戦場ケ原から湯元を訪れたりした。明治三十一年、夏にもまた日光に足を向けた。東京府立尋常中学の三年生であった。一ケ月以上を日光で送ったが、二回目なので実測の地図こそない時代といえ、天保八年（一八三七）植田孟縉の書いた地誌『日光山志』を唯一の頼りとして植物や昆虫の採集に歩きまわった。八月の下旬、裏見の滝の茶店の男を案内に二日がかりで小真子、大真子、男体山の縦走をやった。明治三十四年八月には日光女峰山に登った。二年前の冬、同じ中学校の生徒二人が秩父の仙元峠で凍死した事件があって、親からなかなか登山の許可がもらえず、最初の登山は採集胴乱を肩に家を出て無断登山を試みたが霧のため道に迷い、途中たまたま三山掛けの道者を相手のもの売りの男に出会って、何とか家に戻っている。それから数日後、植物学者牧野富太郎、山草家城数馬らの一行に従う機会が出来、無事女峰山に登れたが、花期は過ぎているものの、珍しい植物が胴乱にあふれるほど穫れた。

このころ府立尋常中学の生徒であったのちの英文学者市河三喜、遺伝学者小熊桿、方言学者松村操らが中心となって、お互いの採集品の知識を交換する同人雑誌を発行していた。当時築地にあった府立尋常中学には博物学に熱心な帰山信順という先生がいて、その薫陶を受けた生徒たちが、昆虫、植物、鳥類などの研究に熱中するものが多くなった結果である。このグループのメンバーも増えてきたので、会名を日本博物学同志会として、明治三十四年に新しく発足し、機関誌『博物之友』が活字印刷で発行された。第一巻第一号が出たのは明治三十四年七月である。武田はすでに中学を卒業していたため、後になってこれを知り、明治三十四年の秋に入会した。武田

は入会すると明治三十五年の第二巻第七号からほとんど毎号寄稿を続けた。『博物之友』は年ごとに内容が充実し、明治三十八年には六冊発行し、ページ数を増やしたが、それでも収まりきれないほどの寄稿があった。

博物学同志会の会員たちは、高等学校から大学に進むにつれ、研究の範囲も広がり、その資料も平地から高山へと移って、山の紀行文の投稿が多くなり、臨時に山の特集号でも出さねばならないだろうという話まで出てきていた。

ちょうどそのころ、明治三十七年二月発行の雑誌『太陽』の第十巻第三号に小島烏水の書いた「甲斐の白峰」が発表された。この文には、地理、動植物、山の測量、さらに『平家物語』の「北に遠ざかりて白き山あり」といった文が引用され、難解な荻生但来の漢文『峡中紀行』にまで及んでおり、博物、理科関係の雑誌しか読んでいなかった武田にとって、まったく目新しいことが、きわめて興味深くしるされていた。

いったい、小島烏水とはいかなる人物かというので、烏水が横浜の住人だということを耳にすると、人を介して、横浜にいる博物学同志会の高野鷹蔵ともども、横浜西戸部町にあった烏水の家を訪れたのは、明治三十八年の二月ごろのことであった。おたがいに大いに話がはずみ、烏水も博物学同志会へ入会することになった。

烏水は明治三十五年八月、友人の岡野金次郎とともに槍ケ岳に登り、横浜に戻ると、ある日、岡野の務め先のスタンダード石油会社で支配人が持っていたウエストンというイギリスの宣教師の書いた『日本アルプスの登山と探検』という一冊の洋書を手にした。岡野は、自分たちが登ってきたばかりの山にすでにイギリスの宣教師が登っており、その本には山の写真まで出ているので大いにびっくりして烏水に知らせるとともに、ウエストンが当時横浜に住んでいることをつきとめ、ここで岡野、烏水、ウエストンとの交流が始まったのである。

ウエストンは明治三十八年三月、二度目の日本滞在をすませて帰英するに当り、横浜のオリエンタル・パレス・ホテルに岡野、烏水、武田の三人を昼食に招き、その席上、日本にもイギリスのアルパイン・クラブのような会を作ることを熱心にすすめた。

こうして日本山岳会発足の気運はようやく芽生えてきたのだが、この明治三十八年とう年は山登りの面から武田もきわめてアクティブな行動を示していた。

四月には秩父の仙元峠、六月には日光、七月には日光から初めて尾瀬を探り、八月にはいると、大宮口から富士山に登り、吉田口へ下山し、日野春から八ケ岳の権現岳、さらに大町へ向い、四谷から大雪渓を白馬岳に登り、頂上の粗末な石室で十二日間籠城し、九月には丹沢塔ケ岳に足を伸した。

日本山岳会の生れる気配はこうした中で次第に熟してきたのだが、しかしこの時代に、登山を趣味とする人間がどのくらいいるかまったく手がかりがなかった。そこで日本博物学同志会が中心となり、その支部のような形でまず発足させ、『博物之友』に載せきれない山岳の記事を集めた雑誌を出してはという話が出た。明治三十八年十月十四日、日本博物学同志会の第十三回例会があり、そのあと、高野鷹蔵、小島烏水、高頭仁兵衛、梅沢親光、河田黙、城数馬、武田久吉の七人が、飯田橋の近くの神田川の河岸にあった富士見楼という三階作りの料亭に集まり、日本博物学同志会の支部として、山岳会が設立される最終的な相談会が開かれ、ここに日本山岳会（その当時はたんに山岳会と称していた）が生ぶ声をあげることになったのである。

正確な記憶をもとに、このデータを武田博士が初めて話されたのは、昭和二十四年三月二十六日、東京お茶の水の日本体育協会本館における「小島烏水を偲ぶ」日本山岳会第百八回小集会「山岳会創立までの小島君との関係」と題す講演においてであった。これは日本山岳会の『山岳』第四十四年第一号（小島烏水記念号）に載せてあるが、武田博士の驚異的な記憶力がなかったら、この貴重な歴史的記録は永久に埋もれたままに終わってしまったかも知れない。

日本山岳会の機関誌は、翌明治三十九年四月創刊号が発行されたのだが、その題名について議論が続出した。『山岳之友』、『山岳雑誌』、あるいは『雲表』などさまざまな意見が出たが、ごく平凡にありのままの『山岳』にしてはと提案されたのは武田久吉であり、これが採用され、いまに到っている。また、いまのJACの三文字を組み合わせた日本山岳会の会章のデザインをされたのも博士である。

武田先生愛用のカメラ、燈灯、弁当行李（大町山博展示品）

歯に衣を着せない、きわめて辛辣な表現をされる方で、筆者など日本山岳会の会報を編集していたころ、誤植が多く、博士から印刷屋の小僧にもおとる、などといつもお小言をちょうだいしていたものだが、たとえばウエストンの『日本アルプスの登山と探検』について、「私が初めて白馬岳に登るに当って参考にしたが、ほとんど何ら得るところなく、失望すべき著書である」とか、日本アルプスの名称について「人のふんどしで相撲を取るような狡猾なところはなくても自分の下着を隣りの物干にかけるくらいの器用なことをするウエストン」などと「日本アルプス名称論」の中で記されているが、しかし上高地にあるウエストン師のレリーフを大切に守り通してくれていたのは博士であることを知っている人は少いであろう。

ウエストン師の喜寿と勲四等瑞宝章の授与を記念して上高地に師のレリーフが設けられたのは昭和十二年のことだが、戦争の激化に伴い、金属類の供出と敵国人の像というので当局から目にされそうになったため、日本山岳会は昭和十九年これを取りはずし虎ノ門のルームに保管していた。昭和二十年五月の空襲でルームは焼け落ちたがレリーフは焼け残り、掘り出されて終戦まで管理されたのは武田博士であり、さらに博士は、当時製作者の佐藤久一朗が満州から戻っていなかったため、溶けた青銅の部分を自分の知り合いの彫刻家杉浦藤太郎に依頼して補修までしてくれていたのである。

第一回のウエストン祭が行われたのは、昭和二十二年六月二十四日だが、武田博士によって守られていたウエストン師のレリーフが、また晴れてもとの場所に還ったのであった。

（文中敬称略）

（日本山岳協会常務理事）

ことわざ戈時記

山蚕（ヤマコ）と味噌汁は当ったことがない

青木　治

古くから穂高町有明地方は日本唯一の山繭の特産地である。

安曇野の西方北アルプス燕岳（北燕）を源流とする中房川は中房温泉の湯煙りの中を貫流し有明山を大きく迂回しつ、深い渓谷をつくり、有明山麓宮城（ミヤシロ）で河口を開き広大な扇状地を展開している。扇央部分までは広い櫟（クヌギ）林で、昔から正真院原といわれている。これは近くに大町市の大沢寺縁りの正真院という禅寺に因んでのものである。この原が天蚕（テンサン）の古里である。

山蚕には二種類がある。一化性の天蚕（テンサン）と二化性の柞蚕（サクサン）である。天蚕は古くから正真院原にいた野蚕（ノサン）であったが、柞蚕は明治初年中国の満洲から輸入されたものである。

両種とも櫟・楢（ナラ）の葉を食べる食性なので、春芽吹き前、一株から数本出した櫟を、一・五m位で上部を伐採し、桑の根刈仕立のように矮性に仕立てる。そして飼育林であるこの櫟の枝に若芽の芽生える五月中、下旬頃に、山蚕の種十二、三粒を糊付した紙片を一株に数枚結び付ける、これを山付という。孵化した山蚕は櫟や楢の葉を食べ、四回の脱皮の後五、六cmの濃緑色の保護色を持つ太った成虫となり、天蚕は五十五日位で黄緑色の大きな四、五cmの美麗な繭を葉二、三枚を巧に合せ、その間に営繭する。柞蚕の繭は薄い褐色である。そして櫟の林に散在する繭を集める、繭かきである。

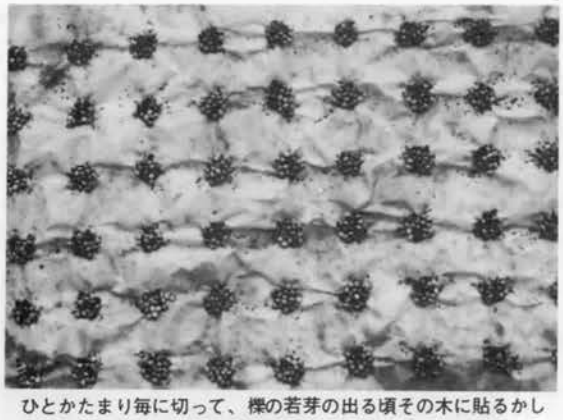
この山蚕は屋外の野天の放し飼いなので、蜂・蜘蛛（クモ）などの昆虫や雀・もず・鳥などの野鳥等の天敵・蚕の大敵微子病、それに山蚕は「照虫」と言われるように、五齢期や上蔟期の七月頃に多い雨天等は何れも凶作の原因であり概して当りが少なかった。

それなので「山蚕と味噌汁は当ったことがない」という俚諺が生れている。家蚕の秋蚕も春蚕・夏蚕に比較して病気に罹り易く、収繭が少ないので、「山蚕」を「秋蚕」におき換えて「秋蚕と味噌汁は当ったことがない」という人もいる。

天蚕糸は不染性繊維などの絹織物に交織すれば、その部分のみ染らず美麗な光沢を放つので、その性質を活用して西陣織、丹後縮織などの模様部分に交織される高級織物となる。その為天蚕糸の値段は絹糸の三倍はしている。柞蚕糸はそれに比して少し劣る。

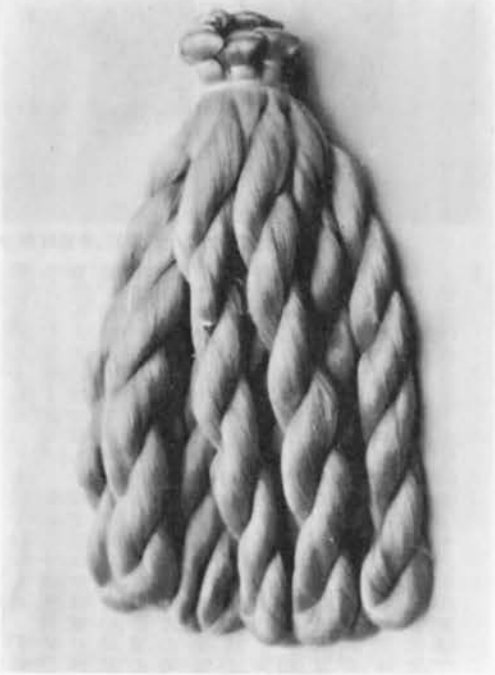
当有明地方では古くからこの正真院原に天蚕種の野蚕を江戸時代天明の頃人工飼育に成功し、享和の頃には初めて飼育林を設け、製糸し衣服の資としたといわれているが、それが幕末に近づき生産が急増し、明治・大正の頃は最盛期で山蚕で産をなした家も多い。

明治三年旧暦五月十九日には、イギリス公使館付一等書記官アダムス、外士官（公使館付外交官）デヒシン・ワクマンの三名が旧松本藩士村田宇八郎等十数名に案内され、乗馬にて隊列を整え、古厩村（穂高町古厩）名主百瀬李左衛門宅に二泊し正真院原の天蚕飼育状況の視察をしている。（北安曇郡誌編纂委員）



ひとかたまり毎に切って、櫟の若芽の出る頃その木に貼るかしばりつける

山繭（天山繭）



天蚕糸

博物館だより

日本山岳写真協会展おわる

10月2日より12日まで開催されていた「83―山・われらをめぐる世界」は好評のうちに終了しました。出品作品は全倍紙18点、全紙37点の合計55点。

今後の企画展

・大町美術会展
10月15日～10月23日、大町美術会員の作品
観覧料　無料

・大町の遺跡展
10月30日～11月13日、大町市内の出土品、遺跡写真
観覧料　平常料金

山と博物館第28巻第10号
一九八三年十月二十五日発行
発行所　長野県大町市　TEL22〇二一一　大町山岳博物館
印刷所　長野県大町市俵町　大糸タイムス印刷部
定価　年額一二〇〇円（送料共）（切手不可）
郵便振替口座番号（長野四―一三二九三）